

交流会2 「看護師のための学会活用術」

看護師のための学会活用術

Effective Usage of Academic Conferences for Nurses.

春名 寛香¹⁾

Hiroko Haruna

若林 侑起²⁾

Yuki Wakabayashi

1. はじめに

看護師が所属する学会には、主に看護専門職で構成され看護に関する内容に重きをおいた看護学会、多職種で構成され、保健医療福祉といった幅広い内容をテーマとして扱う学会などがある。後者は、様々な専門職者が参加する学会であるからこそ、看護学会とは異なる学会参加の意義やメリットもあると考える。

看護系学会の主な事業は、社会の人々の健康と福祉に貢献するための社会活動や学術集会の開催、研究活動の促進や学会誌などの発行、セミナーの開催、国内外の関連学術団体との協力と連携、政策への取り組みなど多岐に渡る。学会は、これらの事業をとおして、看護学の発展に寄与し人々の健康と福祉に貢献することなどを目指している。

中でも、学術集会の場合は、看護師にとって専門看護領域における旬のトピックや新たな知見が得られる機会であると共に、他施設の看護師や多職種との交流の場でもあり、看護師の多くが、少なからず一度は参加したことがあるだろう。

一方で、学術集会に参加した看護師からは、数多くある学術集会から自己の目的に見合ったものを選択することの難しさや、学術集会で得た情報や知見を臨床現場で活用していく際に困難さを感じるなどの声が聞かれている。これらのことから、看護師が学術集会への参加や知見の臨床活用に関してハードルを感じているようにも思える。

そこで、本交流会では、学術集会（以下、学

会）に焦点化し、1. 学会参加の目的 2. 参加する学会の選び方 3. 学会活用方法の3つのテーマを軸に、橋内堅司氏（神戸市立医療センター中央市民病院 看護師長）、萩岡あかね氏（神戸市看護大学 小児看護専門看護師）、山尾美希氏（神戸市看護大学 慢性疾患看護専門看護師）の看護管理者、専門看護師でもある3名と交流集会参加者での意見交換を行い、学会活用の視野を広げていく機会とした。なお、交流集会参加者には、多施設の臨床看護師、看護教員、看護学生の方々に参加していただき、各々の立場から多くの貴重な意見が出た。その内容について、一部ではあるが、以下に報告する。

2. 学会参加の目的について

このテーマでは、自己の学会の参加目的の顕在化と共に、参加目的の視野を広げることを目的にディスカッションを行った。

主な参加目的としては、自己の看護専門分野や所属病棟の医療及び看護に関する最新の知見を得ることや、専門看護分野以外の学会に参加し、関連し必要と考える専門知識（例：心理系等）を得ることを目的として参加するという意見が出た。加えて、学会に参加すること自体が、自身が保有する専門資格の更新ポイントになるとの理由で参加するという意見もあった。

次いで、研究発表を目的とし参加する場合について、看護管理者の立場からは、研究発表や他施設の研究発表を聞くことが、自己の看護実践を客観的に

1) 神戸市看護大学 Kobe City College of Nursing

2) 神戸市立医療センター中央市民病院 Kobe City Medical Center General Hospital

振り返る機会となり、モチベーションの向上にも繋がると考え、スタッフの研究発表を支援しているとの意見が聞かれた。実際に、学会に参加したスタッフからは、他者から自施設の看護実践や取り組みについて承認を得る機会になったなど、学会での研究発表がポジティブな影響を与えたという声も聞かれたとのことであった。

また、プライベートに関する内容としては、学会の開催地を確認し、学会終了後の観光などリフレッシュ目的も兼ねて参加するなどの意見も聞かれた。

一方で、看護学生や新人看護師時代においては、学会は知識や経験がある人が参加するものであり、学会参加に対する敷居の高さを感じているとの意見も見られた。特に、看護学生時代は、学会への参加を考えたことすらなかった、あるいは余裕がなく参加できなかったとのことであった。このような意見に対し、学会参加を身近なものとするために、まずは、所属病棟や専門看護分野に関連した学会に先輩看護師と共に参加してみることや、近隣で開催される学会に参加してみるなどの意見が聞かれた。加えて、看護学生時代から学会に参加することは、臨床看護師との交流や臨床現場の看護に触れる機会になり、看護学生の看護の学びをエンパワーする機会になるのではないかと考える。そのため、看護教員としては、学生に対して、学会の情報提供や共に学会に参加するなどの支援ができるのではないかと考える。

3. 参加する学会の選び方について

このテーマでは、参加する学会を選ぶポイントや視点について視野を広げることを目的にディスカッションを行った。

選択するポイントとして、主に、専門看護分野の主要学会や所属病棟のニーズに合致する内容を扱っている学会を選択するとのことであった。加えて、学会の主要テーマや教育講演のテーマおよび演者、関心があるセミナーとのタイアップ、学会参加が自己の専門資格更新に繋がることなども、考慮する項目に含めているとの意見が聞かれた。例えば、日本老年看護学会や日本小児看護学会などの看護関連学会や日本小児学会などの医学関連学会などがこれに該当し、自身の専門分野に対する自己研鑽の場として選択されていた。また、研究発表をする際においては、研究テーマと学会の専門性との合致だけで

なく、演題投稿のしやすさ、誰をターゲットに研究成果を伝えるべきかを考慮し、参加者の特性などを踏まえて決定するとのことであった。

加えて、自身の役割や看護臨床経験年数によっても選択する学会は異なる。新人看護師時代は、エビデンスに基づく看護技術の習得に重きを置いていたこともあり、日本看護技術学会に参加をしたり、専門看護師については、リソースとしての活用促進を意図し、日本看護管理学会に参加し、管理者の考えを知ると共に名刺交換などを行い、自己の役割拡大に繋げるとの意見が聞かれた。さらに、経験年数を経る中で、自身の専門分野に関連する学会を選択するだけではなく、臨床倫理に対する興味や教育の役割を担っていることなどの理由から自身の興味に関連した学会へと広がりが見られた。

また、まずは様々な学会に参加してみるということや、学会化せず研究会として継続されているものに参加するなどの意見も聞かれた。研究会は、学会と比較し日々の実践報告を通しての身近な交流や学びが可能な印象があるという意見であった。

上記内容が、参加する学会を選択するポイントとして挙げられた。そして、学会情報については、学会参加時に配布される他学会のリーフレットやインターネットでの検索など、随時アンテナを張り、情報収集をしているとのことであった。その一方で、学会に参加したことがある先輩看護師や上司から勧められて参加することがきっかけで学会に参加したスタッフも多くいるため、まずは学会に精通するスタッフとともに、学会に参加し、学会がどのようなか経験する中で、自らの選択するポイントを見つけていくことも大切ではないかと考える。

4. 学会活用する方法について

このテーマでは、学会参加をより充実したものにし、学会参加の目的を達成するために、参加者が学会中にどのような取り組みをしているか、および学会での知見を臨床現場でどのように活かしているかについてディスカッションを行った。

まず、学会での取り組みとして、様々な「積極的な取り組み」を行っているという意見がみられた。特に意見として多くみられたのが「研究発表に対して質問を行う」、交友関係を広めるために「名刺交換を行う」、同職種のみならず他の関連職種に対しても「コンタクトを取る」ことを行う中で、自身の

興味を深めるとともに、様々な人との関係性を築くための取り組みを行っていた。

また、研究発表する際、発表方法の選択にも気を配っていた。例えば、学会参加者との意見交換がより近い距離感でできることからポスター形式での発表を選択したり、自施設での取り組みが伝わるようにDVDなどの様々なツールを用いるなどの工夫をしているとの意見があった。さらに、研究発表は、他者に自己の看護実践を伝えるというトレーニングの機会にもなるため、研究発表することが自己研鑽に対する取り組みになるという意見もあった。

このように、自らが積極的に学会に参加していく姿勢を持ち、他者とのやりとりを進めていくことで、自らの看護に対する思考を深める機会になると共に、モチベーションの向上にも繋がると考える。

また、学会併設の企業展示についても、新製品などについて情報収集し、自施設で試供品を試して、物品の変更が可能か判断しているとのことであった。

学会参加後には、学会で得た知見や他施設の取り組みなどを自施設に持ち帰り、マニュアルの改定に繋げたり、あるいは、知見を取り入れて日々の看護記録を記載することで病棟全体に伝達するなどの取り組みを行っていた。

5. おわりに

本交流集会のディスカッションを通して、学会参加をより充実したものにするための、個人の具体的な取り組みや個人の学会参加を支援する看護管理者の考えを共有することができた。また、役割や立場、臨床経験年数などによっても、学会参加の目的や活用方法は異なってくる。これらのことを共有できたことから、学会活用の視野を広げる機会になったのではないかと考える。そして、参加者および3名の発表者の意見を通して、学会活用の根底には、自身の日々の看護実践をより良いものへと繋げていくことのみならず、自部署や自組織の変革への視野も含まれていることを改めて実感した。

学会活用をより有意義なものとするために、本交流集会での意見をご参考にしていただければ幸いである。加えて、学会参加を敷居が高いと躊躇している方に対しては、まずは、誰かと学会に参加しその場の空気を味わってみることを提案したいと考える。

最後になりましたが、本交流集会が有意義なディスカッションの場となりましたことについて、参加していただきました皆様、3名の発表者の方々に感謝いたします。